

職業と人生

鈴木武直

あなたがたのうちに良いわざを始められたかたがキリスト・イエスの日までにそれを完成して下さいにちがいないと、確信している（ピリピ人の手紙一―六）。

世界一の理髪師にならうと思う

私が現在の職業に従うようになったのは、両親のすすめであり、自分でも崑んで修業する気になったからでもありません。た。

弟子入りして白衣を着せられて営業所に立たされた私は、その瞬間「世界一の理髪師にならう」と思ったことは今考えると不思議ではありません。爾来四十四年大正昭和の激動激変の渦中にしかも世渡りの下手な私が今日まで大禍なくやり通

して来られたことの中に、大いなるそして、お恵み深い神の御導きを感じない訳には行かないのであります。

やればできる

技術を身につけるためには並大底の苦勞ではありません。初めから世界一にならうと思つて居る私は、何人よりも勝れた技術を身につけるにはどうしたらいいかと子供心にも思つたのです。先づ第一に誰でもできることで誰よりも上手にならうとして、実行し初めたのが床を掃くこと、刈り落された毛髪を、技術を行つて居る人の邪魔をしない様に処理することでした。萬時このような心構えですべてのことにあたり、一つ一つの技術を修得して、二年後にはその上達を褒められるようになったのです。そんな訳で「やればできる」と堅く思うようになったのです。

先生は一人

剃刀は何丁も持つて、代る代り使うものなのですが、最も自分の心にかなう物は、一丁だけなのであります。何十丁持つて居ても最後に残るものは一丁だけなのです。よく世間で、誰からでも善いことは学ばなければならないと言いますが、それは表面だけ、小手先のことならいざしらず眞の技術を身につけ、極意を受けつぐのには、そんな訳には行かないのです。その意味でも私は誠に恵まれました。私の師となるべき人が私の前に顕れ、その先生は理髪のことだけでなく、クラシック音楽の手ほどき、それに「聖書の研究」（内村先生発行）なども読んで居たり、文学書や絵画などにも深い関心を持つような、大きな影響を与えられたのです。

それは凡て理髪 of 技術を学ぶ上に、大きな役割を果して居たのです。私は一から十までこの先生を先生として、他の人は顧みませんでした。それは私にとって、最も幸いなことでありました。

職業名の移り変り

髪結い床、髪床、床屋、散髪屋（関西地方）理髪、理容、こんなに職業名が変り未だにはつきりした職業名のない職業は、他に類例のないことであると思います。それだけに私たちの職業の性能また性質が一般にも、また業者にも正しく理解されて居ないからであらうと思います。それはともかくとして、理髪という職業は、どんな社会情勢の変化にも大した影響を受けない、デフレ、インフレ、新円切替、封鎖のようなこともさほどの影響を受けないのです。彼の大戦争の空襲の最中でも、髪を刈らうとする人間的欲求はなくならなければかりか、そのような時程益々強い要望の起るものであることを知らされた訳です。

二つの性質

どんな時でも、髪を刈らずには居られない、髪の手入れをしないでは居られないというのが、人間の極めて自然の情であり。この理髪 of 技術には、生活の便宜上のこと、また快感そ

れに美観を満足せしめようとすると二つの性質をもつて居るのです。

生活の便宜上のためのものは、機械的に行動すればよいのであるから、大した問題はないのであるが、美的感覚を満足せしめる・・・技術を行なうことによつて、外観上その人にふさわしいものとするということになると、これは重大なことになる。これを追求すれば、畢竟人間は何んであるかを知らなければならぬことになるのであります。この点理髪師は大哲学者に勝つて悪いということはないのであります。勿論大哲学者でなければ理髪技術者になることはできないということはありませんが、技術者となつた者にとつては、自己の良心の問題となつて来るのであります。

「あなたの髪が横になるか、また縦になるかはフルシチョフがアメリカの大統領になる、またケネディがソビエトを支配するようなことがあるよりも、私にとつては大きなことなのです。」と或る時話したことであつたが、決して大きな表現ではないのです。髪の毛一すじの處理のしかたで、その影響は決して小さいものではないのであります。これは技術上の

ことではありますが、職業を通して、家庭の人、また社会人、そして国民として如何にあるべきか、また職業を通して如何にして正常なる世界観に立つことができるであろうかと考え、そのような自覚が、どのような働きをして、どのような意義をもたらすものであろうかと、考えた時に、私たちの職業も、他の如何なる職業とも同じであつて、軽視されたり、蔑められたりすることは許されないのであります。

使命

「木口小平はラッパを口にあてたまま敵の弾にあたつて倒れました。それでも口からラッパをはなしませんでした。」これは小学生になつた私たちが声高らかに、読みあげたもので、木口小平という人は、ほんとうに偉い人であると子供心にも強く思つたことでありました。

その人はその人らしく生きるということとは容易なことではありません。高尚な理想なくして、ただ楽しく多くの収入を得たいと思つても、その欲望がかりに充たされたとしても、

決して崑ばしきことではありません。徒らなる享樂を追った
り、守銭奴的な生活の空しいものであることは、古来の人々
の述懐に聞くまでもないことあります。秀吉の「露とおき
露と消えぬるわが命難波のことは夢のまた夢」やソロモン王
の「空の空なるかな、いつさいは空である。」などは凡人
の周知のことでありますように全く、そのような欲望を充た
そうとする末路はまことにあわれなものであることはいくら
でもないことあります。

衣食足りて礼節を知るといわれますが果たしてそうであり
ましょうか。衣食足つてからでなければ知ることのできないよ
うな礼節は、眞の礼節でないことは何人も知り尽して居る筈
なのであります。物質的に豊になれば、人間として価値のあ
る生活ができるかというにそうではない。時間的に余裕があ
れば意義のある活動ができるかというに決してそうではない
のです。

これは自分にとって、是が非でもやらなければならないこ
とであるという、強い意志が起つて、初めてなし得るのです。
経済的にまた、時間の余裕があるような時、その時こそ反つ

て、眞に成すべきことができなくなるようなことの方が多い
のではないかと思うのです。大事な要件を依頼する時は、暇
で遊んで居るような人にたのむものではない、とは世馴れた
人の常識であります。それはともかくとして、私のように四十
余年同じ職業に大した事故もなく、続けられたということ
は、自分の意志や周囲の要望だけで、できるものではないと
いうことを痛感せしめられるのです。

福沢諭吉という人が時の政府から教育功労者として叙勲の
沙汰があつた時、自分は教育者として、教育のために、自身
を投じたのであるから、それによつて、いささかのことが
あつたからといつて、あたりまえのことである。自分のよう
なものにどうするというよりは、隣家の豆腐屋や、車を引く
事を業として、多くの人の便宜をはかつて居る人々に、眞先
に勲章をやつてほしい。というようなことをいわれて、自分の
受賞を断つたということであるが、これが、士、農、工、商、
と職業の階級をはつきり付けて居た時代のことであるから驚
きます。職業には貴賤はなく、全ての職業は平等である。

“天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず”といつて凡

ての人は平等であることを、身をもつて生き、他人にも徹底させようとしたのであるからたいした人だと思えます。福沢諭吉という人がこのような態度で、自己の職業に徹し、自己の職責をまっとうできたのは、教育という事業に深い使命感を感じて居たからであると思えます。

日本語の職業という字をどう読んでも、職業という意味を引出すことは甚だ困難であります。業という字は佛教のカロマから来て居るとすれば、いささかの意味は感じられないこともない訳ではありますが、天職となると職業本来の意味がいくらかは感じられるではありませんが、英語ではコーリング (calling)、ドイツ語ではベルーフ (Beruf) というのですが、英語のコーリング (calling) もドイツ語のベルーフ (Beruf) も同じ意味で、「呼び出す」という言葉であります。職業は、救主キリストの神が、私たち一人一人を、羊飼いが一匹一匹の羊の名を呼んで檻からつれだす(ヨハネ一〇・一三) ように、一人一人をよく知って呼び出すのであるといふのです。コーリング (calling) もベルーフ (Beruf) も、職業の厳粛で深い意義を伝える言葉として、ほんとうにふさわ

しい言葉であることを感じさせられます。このように職業というものは、その職業にたづさわった者が、それによって、何物かを得ようとする下向き、姿勢よりも、偉大な力に従って行かなければならないのであるという、上向き、姿勢の大事なことを知らなければなりません。そのことの意味がわからなかつたら職業の何んであるかを、知ることはできません。そして偉大な力に支えられて歩まされて居るのであるという目覚めない限り、その人はその人らしく歩むことはできません。従って自己の職業に従うことの眞の喜びはなく、自己の職業を誇りとするような心境にはなれないのであります。職業を通じて、強い使命を感じてこそ自己の職業に誇りを持ち、明るくそして、高い希望が起つて来るのであります。

生活の原理

一般に生活というと経済のことを思う、しかしそれはあくまでも、第二義的なもので、如何に人間らしく生きるかとい

うことにあるのでありまして、人間が人間らしく生きるということは、如何に道徳的に生きるかということでありまして、人生の眞の目的は、高い品性を備えるにあるということができます。内村先生が京都に居られた時のことですが、奥様の実家を訪問された、実家では、先生の御生活の窮状を察せられて、米やもちをさしあげたのです。一応は有難くいただいた帰途についた先生は、途中現在の生活の不甲斐なさを辱じ、通りかかった五條の橋の上から、もらつて来た風呂敷包みをそのまま川の中へ投げこんで、さつそうとして帰宅されたことが、少年物語となつた内村鑑三にあつたのを讀んだのでありましたが、心の引きしまる思いがしました。

生活の目的が判然としないと、生活に密着して居る経済のことに迷い、まどわされ勝ちになるのです。しかしこの経済―物とか金―に対するはつきりした考えを明かにすることは缺くことのできないことなであります。内村先生の「商人と宗教」というパンフレットの中で、「金をたくさんもつけたということは、決して、もうけない人の思うほど、幸いなものではなく、ある意味ではかえつて不幸なことである。

富者であるという誇りのうちにあつて得意の人もありますが、およそ人がその所有する物質をもつて誇るときは、その人の品性は、はなはだしく下落した時である。そして富は人と人との関係を不純ならしむるものである。富者に対しては、たいていの人が、へつらいと卑屈といつわりをおこないます。うわべだけ富者を尊敬します。気に入りそうなことを、おこなつたり言つたりします。けれども腹の中ではわるく思つていきます。従つて、誰でも実意というものを示す人はありません。富者は人々から形の上だけでうやまわれて、心では遠ざけられるのであります。従つて、世に富者ほど孤独なものはない、かつまた富者の前にたくさんの人が屈従するのを見て、富者は、人間がいかに卑しきものなるかを感じるのであります。金の前に拝跪する人間のみにくさを痛切に見せられるのであります。すなわち富者は人間のうちのつまらぬ人のみが目につきます。云いかえれば金は人を見せしめるものであります。」と金銭や物に対する人間の姿を具体的に述べて居ります。金は生活の上で極めて重要な位置をしめて居りますので、これを正しい認識の上に立つてこれに当たるか、そ

うでないかは、精神生活を重ずる人生にとって大きな問題となつて居ることであることは云うまでもないのであります。物と云い、金と云い、これを卑しめたり軽ろんじたりする事は出来ません。正しく使用することができれば大きな力とすることができからであります。家庭を健全に建てる基本ともなり、社会を益し、隣人を助けることもできる、国に正義を行わしむる原動力ともなる尊い器ともなるからであります。人間を誤ませるものも金、執着せしめて人間生活を虫ばむのも金、しかし恐るる必要は決してありません。勤勉と質素とをもつて、大膽に活用することによつて、生活を前進せしむるようつとめるべきであります。

カイザルのものはカイザルに

だれでも同時に二人の主人に仕えることはできない。こちらを憎んであちらを愛するか、こちらに親しんであちらを疎むるか、どちらかである。あなた達は神と富とに仕えることはできない。(マタイ六・二四) いつどんな時でも、迷う

ことなく自己の生活を正しく進めることのできる道はただ一つだけです。或る時イエスをおとしいれようと、たくらみをもつた者に、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返せ。」といったので、おとしいれることができないばかりか、そのうけ答えぶりに驚きながら黙ってしまった。(ルカ二〇・二〇〜二六、マルコ三・一三〜一七、マタイ二二・一五〜二二) カイザルの物すなわち金、金には金としての分がある、そして神のもの、それは人間の自由意志、すなわち魂。この自由意志は神からいただいた人間にとつて一番大事なものであるので、これほどこまでも神のものとして、ぎざなく、汚れないものとして守らなければならないのです。そして神のものは神に返せといわれたように、私たちの魂はあくまでも、神以外の金やその他のものに奪われることなく、神に返さなくてはならないのであります。だからあなた達は、天の父上が完全であられるように「完全になれ」(マタイ五・四六)とあるように、私たち人間には、どうしてもそうしないでは居られない、そうなりたいという重要な面のあつたことを知らなければならぬのであります。

充たされし希望

しかし人間というものは弱いもので、迷いやすく、禍誤を犯しやすいものです。四十にして迷わず、五十にして天命を知る。とありますが、そういう面もあります。しかし人間は幾つになっても迷います、動揺します。眞剣に生きたい、また生きなければならぬ、そう思つて生活に当るのですが眞剣になればなる程思うように行かない弱い自分を発見させられるのであります。私は獨立して同じ場所で營業するようになってから滿三十年以上になりますが、開業した時から現在まで何の進展もありません。いささかの設備の改繕はできたといつても、経済的な発展は得られなかつた。私は三十年間營業して、店が古くなつたのと、よくも年をとつたものだと思つて見るべきものは何一つないのです。營業の成果である物質的なものでは、私の今日までの働きは全く見る影もない姿なのであります。しかしながら少年の時、心に描いた「世界一」は内容は変わりましたが、たしかに自分は世界一の理髪師であ

るという自覚に立つたのであります。失敗したとか、成功したとかの外側の条件に左右されない、目には見えないが、これこそほんとうに生甲斐のある新しい希望の世界が、頑固な私の、魂が打ちくだかれて、その上に新しく、建設されるようになったのであります。そして現在の境遇を心から喜び感謝しないでは居られない心境に立たされたのであります。そしてキリストを信じ、キリストに頼りたのむ生活は、どんなに巧みな経済的に優れた知者にも勝るものであることを教えられるのです。「空の鳥を見てごらん。まかず刈らず、倉にしまいこむこともしないのに、天の父上は養つて下さるのである。あなた達は鳥よりも、はるかに大切ではないのだろうか。」(マタイ六・二六) たしかに多くの人は生活の建てかたをとりちがいて居るのです。人間としてあるべき姿を失つて居るため、得ようとして益々失うようなこととなつて行くのです。人間として価値のあることを成すにはどうすべきであるかということを探求しなくてはならないのではないかと――人間が眞剣に求めるべきもの、それは神の国と神の義であると聖書にあります。私もそうだと思います。そしてそ

これは、萬人にとって、生活の基本とならなければならないものであると思います。若し神の支配する御国と、神に義とされることを求めることを第一のこととし、最上のこととすることができるとするならば、そのときからほんとうに、あすのことは心配する必要がなくなり、一日の苦労は一日の喜びとなり、感謝のうちを終ることができるようになるのであります。

奉仕

今まで述べてきたような心境になって、職業を営む時、自然と奉仕の精神が溢れて来るのであります。奉仕の精神に立つて成す職業は凡て聖職であります。そしてこのような心境に立つて成す職業に供う勤労こそ眞に尊ぶべきものであります。パウロがテサロニケ第二の書で、福音を宣べ伝える者の態度を極めて具体的に述べているが、（テサロニケ第二、三・六（十六参照））凡ての職業人が、自己の職業を神に捧げて、神と偕になす職業、これが眞の職業であり、そのような

自覚に立ち得た時の職業による労苦、苦痛は、神の慰めとなり、はげましとなって、そのような人の職業を通して、神はご自身の栄光を現すのです。そしてそのような人々によってなされる職業にふるる人々をも、神は救いに導かれるのであります。このように信仰に立つて成す職業こそ眞の奉仕と云われるべきものであると思います。

「人の子がきたのも仕えられるためではなく仕えるためであつて、多くの人のあがないとして、自分の生命を与えるためである。」（マタイ二〇・二八）

一一以上一九六六年五月二十二日、水戸南町二丁目商店会館で水戸無教会聖書集会で述べた話の要旨

彼の時の話は奉仕の所はほんの少し切り述べられませんでした。この後「人と人との関係」「社会的前進」と用意した原稿には少しも觸れることができなかったのは残念でした。

七月二日夜